本シンポジウムの趣旨説明

松本光太郎
（名古屋大学）

名古屋へようこそお越しくださいました。今日参加されている方は、東は仙台、西は福岡が一番遠いと記憶しています。

今回、身の程知らずにも、「鯨岡理論」を私たちが主宰する「てんむすフィールド研究会」で取り上げたいと考え、シンポジウムを企画しました。

鯨岡理論を取り上げたいと考えた理由はいろいろあるのですが、大きなところで6点ほど紹介して、本シンポジウムの企画趣旨に代えたいと思います。

１点目は、鯨岡先生が名古屋へ移ってこられたことです。私は鯨岡先生が京都から名古屋に移られる前に、その旨お聞きしていました。この機会を逃す手はなく、ぜひまとまったお話を伺いたいと気持ちの片隅でずっと思っていました。京都におられたときであれば、お引き受けいただくことは難しかったのではないかと思います。

２点目は、当研究会は質的研究を視野に入れながら活動をしていますが、鯨岡理論は質的研究を実践するうえで、一度対峙・対決すべき価値ある理論であると考えているからです。

質的研究といわれる領域で、方法といわれるものはいくらかあります。しかし理論と、その理論を支える方法が一貫しているものはほとんどないように思います。怒られるかもしれませんが、私自身鯨岡理論の熱心なシンパではありません。ですが私が構想しようとしている理論や方法は、鯨岡理論とどう違うのか意識せざるを得ません。例えば、今日話題提供をされる鯨岡先生のお弟子さんである大倉さんと「メタ観察」をめぐって、ずいぶんとやりとりをしてきました。てんむすフォーラムの第一号には、大倉さんが私に「メタ観察嫌いでしょ」と投げかける場面が収録されています。

ただ、鯨岡理論のシンパではなくても、質的研究を実践する人にとって、一度対峙・対決すべき価値ある理論であることは間違いありません。それが鯨岡理論を取り上げたいと考えた２点目の理由です。

３点目は、鯨岡理論は時間をかけて弛まず構想を続けようやく結実した理論であるからです。今日の企画をやろうと実際に計画を始めたのは、１年ほど前からです。そう決めたきっかけは、若き鯨岡先生と浜田先生が翻訳をしたウェルナーとカプランの『シンボルの形成』、そしてウェルナーの『発達心理学入門』を昨年読んだことでした。鯨岡先生はその後、『心理の現象学』、『ソルボンヌ講義録（意識と言語の獲得）』、博士論文『関係発達論の構築・展開』、『エピソード記述入門』、『ひとがひとをわかるということ』といった著書・訳書を通して足取りを止めずに弛まず理論を構想してこられました。

『発達心理学入門』の最後に付された当時 30 歳ぐらいであった鯨岡先生の文章を読むと、文体は若いのですが、その含意は今と変わらないというのが私の印象でした。若いときの構想を徐々にかたちにもたらしていく、その歩みから学ぶべきことは多いと考えました。

４点目は、鯨岡理論が形成されてきた歴史を知ることは価値があると考えたためです。

著書や講演などで、鯨岡先生はルサンチマンという言葉を持ち出されることがあります。行動科学全盛の時代に、多勢に無勢で関係発達論を構築していくことがどれだけ大変なことだったか、その後の世代である私たちには分からないと公言されています。今そのルサンチマンを語ったとして、私たちに共有できるはずはないのですが、潜り抜けてきた歴史を一端だけでも知っておくことは必要ではないかと考えています。

５点目の理由は、有機体論-全体論的視点という鯨岡理論の背景にある枠組みが忘れさられている点です。

先日『心理の現象学』を読んでいると、鯨岡先生が提示された「生きられる還元」という概念について書かれて箇所を読みながら、鯨岡理論において、主体は個体ではなく常に他者との関連のなかに生きている有機体論-全体論的視点が背景にあることを確認しました。具体的には、「現象学の軌道から大幅に逸脱することは十分承知しながら」とか、「フッサール現象学はこの困難な課題をあくまでも理性の力に訴えて切り抜けようとするかにみえる」といったいわゆる現象学における「主体が意識的に行う反省」と「生きられる還元」は異なることを述べた上で、他者との出会いにおいて自明な世界が揺りうごかされる体験、その体験を徹底的に捉えていくことが鯨岡現象学の骨子であると述べられていたように思います。私自身、有機体論-全体論的視点に強いシンパシーを抱いているのですが、現在ではあまり省みられない視点です。そのような点から、鯨岡理論は貴重だと考えています。

最後に６点目の理由は、鯨岡研出身の方々はこのような企画はやらないと踏んだためです。

なんでお前がやるんだと、お叱りを受けるかもしれません。その際は「鯨岡研出身の人は

やりそうにないでしょう!?」というのが私の用意している返答です。

以上、本研究会で鯨岡理論を取り上げたいと考えた６つの理由でした。

今日は森岡先生、遠藤先生、大倉さん、以上の３人の先生のお力を借りながら、またフロアからのサポートを得ながら、鯨岡理論の現在について考えていきたいと思います。鯨岡理論について考え語るめったにない機会だと思いますので、長い時間になりますがよろしくお願いいたします。

それではまず、鯨岡先生にご講演をお願いしたいと思います。